



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第 百 号 毎月一日発行
平成十年一月一日

年表で読む 古平の歴史

《7》

■木枠に袋網を吊る

安政三年(一八五〇)のことです。

当時、南部地方から来て群来村で鯨漁場を開いていた秋元金四郎が、太い角材で枠を作りそれに袋網を吊り下げ、その中に建網で獲った鯨を一時入れておいて、それから別な船で中の鯨をくみ出して運搬するという方法を考え出しました。

■袋網の吊る方法を改良

ところが翌年、同じ群来村で鯨漁場を開いていた白岩八右衛門が、木枠に吊っていた袋網を親船に取り付ける方法に改良しました。これは枠網といわれ、大変便利であったのでほかの漁場にも急速に広がりました。

その後、美国の工藤平助がさらに改良を加えたといわれています。

ます。

■枠網の欠点を改良

枠網の考案で鯨の漁獲高も増えましたが、時化になって枠網を放棄しなければならぬ時、船と結びつけている網を切って枠網をはずしますが、その時、結んでいる網を同時に切らないと船が転覆するおそれがありました。

明治の始めころ浜町の山本春松が、網をつないでいるひもを引き抜いて鯨を捨てる方法を考えました。これによって人も船も網も無事に避難できるようになったのです。

■《網切り騒動》が起きる

松前藩では公平に鯨漁ができるように、大網を禁止して刺網だけを許可してきましたが、目

のどこかない後志地方から北の漁場では大網を使っている漁場がありました。たまたま江差地方が薄漁だったこともあって、安政二年(一八五五)の春、乙部から熊石辺りまでの八か村の漁民五百人余りが、数十隻の船に乗って各地で網を切断しては北に進み、ついに古平場所まで押しかけて来ました。そして、群来村に上陸した首謀者がここで捕らえられたことでこの騒ぎも解決したのです。

■蝦夷での交易の値段

文政時代(一八二〇～一八三〇)以後のものと思われるアイヌの人たちとの交易値段が、岡田家の記録に残っています。

アイヌの人たちが鯨一束(鯨二百尾)で交換できたもの

米一升、清酒二盃(一盃は約二・五合)、大豆五合、

小豆五合、サバ割き二丁、

えぞマキリ一丁、鎌一丁、

きせる一本、皮針一本、

その他のものについては、酒桶(うるし塗り)大六十束、中四十束、小二十束、古着上二十四束、中十六束

賀春

平成十年元旦



古平町史編纂委員会

委員長 越中 庄司

八木 金藏・丹後 藤雄

岩崎 勝博・木村 輔宏

本岡 鉄男

山口 文彦・西館 昌巳

高野 俊和・宮本 正教

水見 八郎・田岸 倉治

古平町史編纂室長

(総務課長) 中野 啓一

囃 託 村井 芳男

千しあわび一束(五百個、大に限る)で、米八升、酒四升、

また、獣皮、熊の胆、タカの羽などを藩主に献上すると藩から褒美が与えられた。

熊の胆一頭分 玄米二斗五升

カワウソ毛皮一枚 玄米四升

キツネ毛皮一枚 同

テン毛皮一枚 同 一升

アイヌとの交易が莫大な儲けになったことがわかります。

せたかむい 百号達成を祝して

明けまして

おめでとうございいます

あわせて《せたかむい》が百号を迎えたことをお祝い申し上げます。これもひとえに関係者のご尽力の賜物と思われ、改めて敬意を表しますと共に、今後ますます発展されますようにご祈念申し上げます。

顧みますと、健在だった頃の私の亡夫はいろいろと昔話を語ってくれたものでした。それらを聞きながらつたない文章をつづってきましたが、自分の書いた文章が初めて《せたかむい》に掲載された時の嬉しかったことは、今でも忘れられない思い出となりました。

毎月《せたかむい》が発行になる日は郵便局まで自転車で行き、もらってきたては主人と二人で楽しく読んだもので

渡辺 ハツエ

す。ときには私宅まで届けてもらうこともあって、ありがとうございます。

先日、愚息から私に電話がありました。

櫓 (やぐら) ごと た つ

竹内 コト



いまの季節になると思い出す懐かしいもののひとつにこたつがあります。

昔はみんな木造の家でしたし、鯉漁場をするようなところは家が広く、したがって部屋数も多くありました。私は沢江村の鯉番屋で子ども時代を過ごしましたが、当時はどこの家でもそうであったように茶の間に薪ストーブが一つあるだけで、そ

「年寄りの書く文章なのだから気取らずに、難しい漢字は使わないで読んでくださる皆さんが読みやすく、わかりやすい文章を書き、誤字にはよく気をつけるように……」

と、ありがたい忠告をしてくださいました。

毎月子どもたちにも《せたかむい》を送ってやり、自分たちの故里をしのんでもらっております。

のほかの部屋はこたつしかありませんでした。一般にいうところの『やぐらこたつ』です。囲炉裏(いろり)の上に置いたこたつには厚いふとんをすっぽり掛けて、中には薪の消し炭などを使っていました。手足を暖めるにはよいのですが、何かを着ていないと背中が寒いのです。でも、お正月にはこたつの上でいろいろな遊びをして過ごし

た覚えがあります。トランプやカルタ、家族合わせ、また、炉の中にいもを埋めて焼いて食べたこともあり。兄たちはよく将棋や、五目並べをしていたことを思い出します。

母は、子どもたちの寝巻きや手袋などをこたつの上で暖めてくれます。ほのぼのとした暖かさが、なんとしても忘れられないのです。ほんのひとつかみの炭がこんなに役立っているんですね。今はなんでも電気と石油があれば、とにかくそれで用事が足りている時代です。

私はいつも思うんですが、病人にとっては薪ストーブがとても身体にやさしく感じます。昔の生活を体験した者にとつては、やはり薪ストーブのよさがあります。子どもたちが外で遊んでいる間は、代わって猫がこたつの上で気持ちよく寝ています。なんとなく心のあたたまるとような光景ではありませんか。私は人の心もあつたかなのが大好きです。



遙かなる故郷の思い出 痛恨!

[40]

戦友松岡外与造さんの戦死 ④

榎 桐

義 我

吉 春

八月十九日、突然停戦命令が出た。後一日停戦が遅れていたら近代装備のソ連軍二万五千人の中へ、装備の劣った連隊全員が一斉に突撃し玉砕していたろう。アツツ島同様の悲劇の連隊といわれるところであった。

停戦協定が成立するとすぐに武装解除となり、八方山からソ連兵に監視されながら兵たちは黙々と下山した。

そのまま私たちは捕虜として、古屯の元日本軍の兵舎に一時収容された。その時に、同年兵であった一中隊の桜庭ラッパ手とばったり会ったので、「松岡さんは無事だったか」と尋ねたところ、

「戦死したよ——」

との言葉が返ってきた。

東北人特有の口の重い彼がポ

ツリポツと語ってくれたところ

によると、桜庭君は松岡さんと同じ指揮班員だった。松岡さんは続出する戦傷者の手当てと救出に駆け回っていたが、自らも

被弾して戦死をしたという。桜庭君は捕虜となって下山する時に、松岡さんの遺体を掩蔽壕

(えんぺいごうリトーチカ)の中に収容し寝かせて来たという。出来れば埋葬したかった

が、停戦、武装解除、捕虜として下山で時間がなく、残念だったがどうにもならなかったと、

彼の目にきらりと光るものがあった。私にとって、遺体を掩蔽壕の中へ収容してくれたことは

何よりの救いであった。

松岡さんにとってこの十一日間の苦闘はいつたい何だったの

だろうか。終戦も知らず、ただ

黙々と戦って、二十代の若さで

死んでいった松岡さんは、結果的に無駄死したことになるのか。そんな松岡さんたちの悔しさ、無念さを思った時に、どこ

へも持っていきようのない怒りがむらむらと込み上げてきた。

刀折れ矢尽きた、勝利なき戦いは終わった。敗戦、これは冷

厳な事実として受け止めなければならなかった。

停戦により、屈辱的な捕虜として酷寒の北樺太で死ぬより辛い。飢餓地獄と言語を絶する過

酷な重労働の中で、戦友と助け合いながら生き抜いてきたが、

「天はいまだ我を見捨てず」、終戦一年四か月後の昭和二十一年十二月、樺太の真岡港より引

揚船に乗り夢にまで見た故郷古平に帰還を果たした。

復員してすぐに、松岡外与造さんの実家をお訪ねして、外与

造さんの戦死の状況などお話ししようと思っていたところ、松

岡家ではすでに引越して古平にはいないとのこと、さ

てどうやって松岡家へ報告するか思い悩んでいたら、港町の岩

崎造船所の旦那さんが私の所へ訪ねてきた。

「橘さん、松岡さんの外与ちゃんが戦死したってほんとうですか。」

「ほんとうです。私もどうやって知らせたよいか思いあぐんでいました。いずれ復員局の方から戦死公報が届くと思いますがよい話ではないので、どうやって切り出すかとよわっていたところですよ。」

岩崎さんにくわしい話を聞かせてほしいといわれ、戦闘状況や戦死の場所、戦死した年月日、戦死を確認した兵隊の氏名などを話した。それを聞いて岩崎さんは、私から聞いた通りのことを手紙に書いて、松岡家へ出してくれるとのことだったので、私も心の重荷が少しは減ったような気持ちになったのである。



ふるさとの
香りを運ぶ
せたかむい

『せたかむい』発行一〇〇号
おめでとうございます。

発行に携わっておられます方々のご苦勞に、改めて感謝致します。

私は、昭和三十年代に内地から稲倉石鉦山に転勤し今は富山に居住しておりますが、昨年の一月に「稲倉石鉦山のあゆみ」を冊子にまとめ限定出版しました際に、町史編集室の村井芳男さんと懇意となり、『せたかむい』の惠送を頂いております。

そこには、古平町の歴史・文化の匂い・現在の動きが網羅され、懐かしさが満載されておりました。

とりわけ私の目を釘付けにしたのは、社員であった私たちでさえ知らなかった稲倉石鉦山の史実が、めんめんと掘り起こされていた事でした。

まさに先祖を捜し当てたような「歴史の再発見」であり、貴

重な記録でもありました。

『せたかむい』で知った史実の記事をコピーし、元所長さんをはじめ、富山や東京地区に転住している元社員の方に送っておりますが

「嬉しい」

「懐かしい」

と大評判で、古平町を離れた私たちにとっては、故郷の香りに浸る唯一の便りであり、何ものにも勝る貴重な読み物でもあります。

これからも益々充実した内容で、町民はもとより、古平町を離れた私たちにも郷愁の夢をふくらませ下さい。

編集諸氏のご苦勞を偲びながら一〇〇号の発行に大きな拍手を送ります。

おめでとうございます。

富山市 高橋 藤蔵
(元・稲倉石鉦業所勤務)

昔からよく聞かされた
ことわざから

福井 幸平

昔は古平では、自分のところで井戸やポンプを持つている家は少なく、多くは共同のものを使っていました。川に近い地域の人は、炊事から洗濯、所によつては共同風呂にも使っていました。

ある人が川で小便しょうべんをしていると、それからいくとも離れていないところで洗い物をしている人がいました。
「そつたどごで小便したら、きつたねえ！」
するとその人はゆうゆうと、
「川の水はなア。三尺流れればなんもきつたなくねえんだ」
『川水三尺』
といいますねえ。

× × ×
今も昔も、どこでもある話。
あんまり姑がイジめるもんだから、嫁さんがとうとう家を出て行ってしまいました。ふだんから話題の少ない田舎のことですから、尾ひれがついてにぎやかなこと。
「あつこの姑さんだら、鬼婆おにばばだつて有名だもんねえ」
別なところでは、
「あの嫁さんだら、どごさ行つたつとまらねエバサ」
こうなると、後は双方で悪口の言い放題。とうとう元のさやにはおさまらなかつた。
嫁さんが実家へ帰ると出戻りだが、もと通りになるのは出戻りとは言わない？
『覆水盆に返らず』
× × ×
今年一年の初相を、漢字一字で表すと「倒」という字だそうだが、
「七転八倒」の苦しみ。ついには倒産というのにも珍しくないのご時世です。その多くは借金を隠し、うわべをかざつたそのついでです。
『シラミと借金隠せば増える』
まアこんなところでしようか。
イヤなこと忘れてまず一句
鯨漬試食しあえる姉妹

—— 続く ——

—— 稲倉石の思い出 ——

成せば成った

[4]



住民パワーで保育園を開設

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

昭和四十年の事です。

稲倉石鉱山で掘り出したマンガン鉱石は、港町の貯鉱舎まで山間を貫いた索道で運んでいたのですが、コストの安いトラック輸送に切り替えました。

その頃、稲倉石には子供たちが遊べる広場がなく、止むなく道路で遊んでいたのですが、鉱石輸送のトラックが頻繁に通るようになってからは、唯一の遊び場がなくなったのです。

そこで、生活協同組合に隣接している公民館の広場に遊園地を造る事になりました。

住民が子供を遊ばせながらお買い物が出来るといふ、狭いな

がらも一石二鳥の地でした。

この頃、もう一つの運動が起きました。

当時、五・六才の幼児が二〇名そこそこの稲倉石には、幼児向け施設がなく、何とか保育園をつくって幼児さんを健やかに育てたいという運動が、婦人会を中心に起こっていたのです。

ところが、場所・建物・設備・資金・運営・保母さん等、婦人会だけでは解決出来ない難問が、次々と出てきました。

そこで稲倉石全体で取り組む事になり「稲倉石保育園設立期成会」を発足したのです。

会社施設の公民館の一部と完

成後の遊園地を利用すれば、絶好の施設となるので、遊園地の造成と保育園の設立の運動を一元化する事にしました。
当時の私の日記には

役割分担は

- ・会 長 青柳婦人会会長
- ・施設部長 水落選鉱課長
- ・資金部長 金子採鉱課長
- ・総務部長 高橋事務係員

とし、各担当が早期実現に向かって精力的に押し進める事と記されていました。

以来、会社の援助(設備と大口寄付)と、住民のご芳志を基金として準備をすすめたのですが、何と言っても期成会の活動を勇気づけたのは、稲倉石出身の町会議員さんが古平町に請願し「古平町立稲倉石保育園」として認可を頂き、大きな援助と指導をいただいた事でした。

素人集団の期成会にとってはまさに救いの手であり、希望の明かりでした。こうして、皆さんの善意に支えられ、短期日で完成にこぎつけました。

かくして、昭和四十年六月二十二日。保育園・遊園地の竣工

と入園式が行われました。

新設した遊園地は子供たちの歓声でうずまり、完成した保育園は万国旗で飾られ、二十一名の入園児がつぶらな瞳を輝かせていました。

町長さんも遠路わざわざお出でになり、園児さんにお祝いの言葉を述べられ式典に華を添えて下さいました。

以来、家族的な保育園として住民に親しまれ、堅実な運営を続けることができました。

しかし、善意で完成したこれらの施設も、誕生数年にして鉱山の売山・住民の離山によって心ならずも廃園となってしまうました。とても残念でした。

今思うと、日本一小さい・日本一短命の保育園だったのでなかったかと思えます。

でも、一つの目標に皆なが力を合わせた鉱山魂は、忘れる事の出来ない貴重な体験でした。あれから三十年余。頑ななかつた園児さんも今は三十才後半の働きざかりの年代です。

きつと町のどこかで幸せな生活を送っている事でしょう。

《長編詩》

美しいわがふるさと

吉平の海に捧げる

吉 川 義 雄

人の世の変遷興亡

それを綴ると「歴史」とか

ならば 春秋の舞台で

主役を演じた者達だけが

歴史を創った人では無い筈

「一将功成つて万骨枯る」

奈落の暗底で舞台を回した

名も知らぬ無量の万骨を

吾等是如何に遇せばいいのか

草ぼう

草茫の蝦夷地

「ホルカ・フルピラ」

アイヌの人達の平和なコタン

彼等は自然を敬い

草木と同化していた

余分な魚鳥は一切損わな

それが吾が生命と 子孫を養う

天の道 地り道理と

小賢しい利欲など

コタンの人々には無い

風雪の大地で生きる極限の知恵

自然と人を不二と信ずる

美しい生き様 大哲理の生活

相違する価値の観かたは

多くの不幸を生む

極北のエスキモーは

氷から水を得ると信じ

温暖に住む者は

水が氷になると主張して止まぬ

私を生み 私を育ててくれた

美しい海と山河

その海からニシンが去って幾歳

昆布わらの中に毛蟹の姿は無く

ゴリは今 何処にいるやら

天正年代（一六〇〇ころ）

戦国の代も終焉近い頃

清輝 玄秀 獨田弥三右衛門は

落剥の町 近江八幡を捨てて

旅に出た

辿り着いた下北 川内の地

煙霧に浮かぶ未踏の新天地が

海峡の彼方で彼を呼んだ

福山城下から彼の足跡は

遂にフルピラに至る

以来 彼の係累は

大松前町に恵比須屋支店を開き

フルピラ場所を指して

「海陸とも我家の創開」と誇り

十一代二百余年の間を君臨する

切れぎれの古文の断章

幾度か翻解けども

何故か真実の姿が見えぬ

熊石までは和人地

以北の地は立入りを許されぬ

蝦夷の聖地

犯すことあれば コシヤマイン

シヤクシャインの戦乱が

三度となつて和人の血を流すと

神威の岬は場所独占の砦か

他の進出を許さぬ禁制の海か

アイヌの人達との交易が

何故フルピラの創開か

事足りている彼等の生活つ

安酒を与えて海幸を増大させ
莫大な利益を貪ることが
功労者なのか

この海の血の叫び

その慟哭を聴け

「にしんの時期は 身重の女も

駆り出され」

「このままだと アイヌの同胞

は死滅する」と

北方巡視の幕府役人は

噫乎 この声をどこに伝えた

アイヌ介抱の美名の欺瞞

人に生まれて違いはあるのか

美しい豊かな山河を共有し

悲しみを同苦し

喜びを分つて踊る

楽土にしようとか故思わぬ

和人の傲慢は現代も続く

万治（一六五八）の春から

安永（一七八〇）の夏まで

和人の持ち込んだホウソウで

アイヌの人達の姿は消えた

「ラムシヤ」の祭り

春秋自然に捧げる喜びの唄声は
チヨペタン浜から永久に去った

天明の初め(一七八四)

凶漁続く南部和入地
生きんが為の漁民の北上が続く
いわゆる二八取りの始まり
場所請負人の独占をゆるさぬ
新しい庶民勢力の進出

あわて幕府も松前も
北の幸欲しさから

自分の為の定目を次々に変えた
白干あわびといひこは長崎俵物
高価な貿易品であったのだ

吾等の地球に

無限の資源などある筈は無い
山野の樹木から
滴る微生物の養分は
河を下り海に注いで
豊かな魚床を創るのだ

人が犯した環境破壊の大罪は
世紀を隔てて子孫に及ぶ
乱獲を重ねた幾百年

昆布も生えぬ磯焼けの海に
にしんの戻る日は望めぬ

昭和二十五年五月の業火
灰燼の西郷漁師町

着流し懐手

顎で人を使つた人達も
建網の邪魔になると築港を
あらぬ方向に曲げた人達も
遣り出しの上から姿を消した

逞しい人達よ

何処で力を貯え
何処から躍り出たのか
無名の戦士達の
決起再建の苦勞を忘れまい

災わいを幸に変える不屈の戦

い石狩湾百尋線の開発は
すけそう漁で浜は沸く
遠洋百屯船の群衆で
港を遂に狭くした

不屈の魂の住むわが町
楽観前向きを忘れぬ人達よ

戦前 海産干場は球場

サンダー・港友そしてドラゴン
三強の若者達が白球を追う
彼等の喚声に心の貧しさは無い

敗戦

この町に帰る者 頼り着く人
人口は万を遥かに超えた

本来 不幸が何人集まっても
不幸にしかならぬもの
それがどうだ

鎮守の森に太鼓は高鳴り
火災は天高く舞い上がった
生還した若者達は
タク神輿に自由の喜び
建設の意志を乗せて駆けた

盆太鼓は海辺の櫓で響き
踊りの輪は幾重にも広がり
遂に幻の「オムシヤ」を見た

優しい心根の人達よ

人の世に愛別離苦は免れぬもの
ならば悲しみは乗り越えよう
「ローソク岩が
観音像とも見ゆる日よ
再びトンネル事故
ある勿れ (片山栄志)」

海辺の町の無名の文人達よ
あまた達こそ庶民の生活を
生肌で綴る真の歴史家

海に屹立する「せたかむい」を
怒涛の哲号まで護つた勇者
後代に真の歴史を届ける語部
「蔓末に 鉄線一花
威をとどむ (水見句丈)」

美しき「白鳥古丹」よ
「灯を消さずあれ
ふるさとは
吹雪のなかに (吉田一穂)」

尊敬する郷里の詩人諸兄から
豊かな叙情の詩をお借りして
同じ思いでこの長編詩をむすぶ
「せかたむい」百号に寄せて

筆者は現在札幌市在住
古平町役場に勤務、退職して
古平町議会議員を二期勤める
古平中学校校歌の作詞者でも
ある

高野名幸作さん

日記から当時

の世相を見る

高野名幸作さんは、佐渡から渡つて来た石蔵さんの長男として明治十九年に生まれ、浜中小学校を卒業すると当時の商家の慣習として、小樽の岡崎商店に奉公しながら、小樽英和学校の夜学に通いました。

日記はこのころ、明治三十三年一月から書き始めて、昭和三十一年まで実に六十三年間にわたって書き続けています。

高野名幸作さんは昭和四十三年十月七日、八十二歳のご高齢でお亡くなりになりましたが、ご家族からその日記を寄贈されましたので、当時の古平を知る貴重な資料としてご了解を願つてご紹介をします。

まず昭和三年の古平の元旦風景と、大正八年の日記から話題の項目を拾ってみました。

(昭和三年)

一月一日 快晴 *三十四度
起床五時、洗面后神仏に燈明を点し而して家内無事に新春を迎ひしを感謝し、本年も家内一同無事に萬事吉祥ならんことを念じた。五時十五分祝聖会の御詣りに禅源寺へ行く。途中西の宮を参拝す。御寺へ着お参ります。后例之通り和尚の室で新年の御馳走を頂く。六時半に辞す。今朝少し遅刻したから明年からは四時頃に参加することにしよう。郷社へ参詣す。ソロソロ夜が明ける。漁船は年内時化続きの為今日は元旦でも出漁した。至極静かな天候と上ナギで

ある。サモ長閑な元旦らしい。
③ 田 平 等に寄り八時半帰る。よい運動になった。帰って朝のおゾーにを頂き、后初スリ新聞を見年賀状を見る。十時、学校で四方様式あるので行く。十一時から役場で交礼会

ある。百余名参集、十二時帰る。静かな空だ。④ 困支店出本 等により、帰って年賀状出しモレ等を書く。
* 華氏三十四度は、摂氏では一・一度
← (二ページ分原寸)

元日や學者とならん志 卅六 歳		月 日	日 曜	庚子
一		旧十月九日	日	
朝五時起床洗面神仏に燈明を点し而して家内無事に新春を迎ひしを感謝し、本年も家内一同無事に萬事吉祥ならんことを念じた。五時十五分祝聖会の御詣りに禅源寺へ行く。途中西の宮を参拝す。御寺へ着お参ります。后例之通り和尚の室で新年の御馳走を頂く。六時半に辞す。今朝少し遅刻したから明年からは四時頃に参加することにしよう。郷社へ参詣す。ソロソロ夜が明ける。漁船は年内時化続きの為今日は元旦でも出漁した。至極静かな天候と上ナギで		ある。サモ長閑な元旦らしい。 ③ 田 平 等に寄り八時半帰る。よい運動になった。帰って朝のおゾーにを頂き、后初スリ新聞を見年賀状を見る。十時、学校で四方様式あるので行く。十一時から役場で交礼会		

四方 拜

日出 六時五十一分
日没 四時三十八分

日出 後 零時十分

大正八年

- 1/1 十一時より小学校で交礼会あり
- 1/2 初売りが千五百十円あった、昨年より三百円多く一昨年より七百円も多かった
- 2/18 青エンドウ一俵十二円、でん粉十円ぐらいか、七く八円も暴落した
- 2/22 すけそ大漁であった
- 2/26 幸寿丸（四七〇ト）二十四万円で買った四百七十トンの船が不景気で五万円で売れないという
- 2/27 カレイ漁が大漁、一人当たり二百く四百円の水揚げ、おかげで刺網が大いに売れる
- 3/16 鯨刺網の規制問題がやかましくなった、建網も一間の冲出しもできない、道庁に規約改正を求めねばなるまい
- 3/17 美国では建網と刺網業者の紛争、刺網業者百七十余名が支庁を通じて道庁へ嘆願する
- 3/18 漁業取り締まりは厳重にするとのこと、建網は二十五日まで建て込みできない
- 3/30 早くもつづぶ買汽船三隻、帆船二隻が湾内に入つて来ている
- 4/3 タラ大漁、そのほかカスベ、サメも沢山沖上げしている
- 4/7 鯨刺網は大大漁、古英丸が舁船を引いて港内に入つて来る
- 4/13 昨日の大時化で帆船安全丸が破損したが、今は見るかげもない、岸に寄った鯨を拾うのに数百人の人出である
- 4/14 12日の大時化では各地で大損害、古平はまだ軽い方である、今までの漁獲高古平二万五千石、後志では合計二十九万石
- 4/17 鯨大漁で人手不足、三モッコでなければ行かぬと強気である
- 5/2 刺網は網洗いをし後始末である、建網はどこもまだ建てている、古平では合計四万五千石、近年稀な大漁である
- * 5/7 古平浜町大火で被災する、エビス倉で生活する
- 5/28 飯店舗が出来、開店する
- 6/2 午後九時頃、土場より出火。十一棟、十九戸を焼き十時頃鎮火する
- 7/4 古平無尽会社許可が出ないで解散
- 8/5 三山神社が関口さんの方へ移転する、①公園に植木職や出面が入って整備している
- 8/6 学校で在郷軍人の点呼があるというので軍服姿が通る、早朝からラッパの音が聞こえる
- 8/11 りんごをかう人が来る、一斤十銭で売る
- 8/17 度量衡販売の許可書（道庁長官）が届く
- 9/4 札幌から岡野農学博士が古平農会に来る、町内のりんご園を視察、余市の生産者が同道して来た
- 10/17 三山神社の大川さんに来てもらって地鎮祭をする
- 10/18 家の建前をする、大川さんご祈祷、紅白のモチまきをする、手伝い総勢六十名ほど
- 11/13 古平小学校に勤務されていた阿波先生が逝去される
- 12/16 天気も良く今日から新宅へ移る、小樽より共栄丸で荷物が入る
- * 「禅源寺住職・秋田岳転和尚の記録から」
- 五月五日（旧四月八日）浜町土谷座にて、当時鯨場の網の建っている間は興業物はせぬ習慣であったが、四月八日ということもあり、まだ網が建っているのに小樽より活動写真が来て、技師が素人のため、フィルムに引火して午後六時頃出火、浜町の約二百戸余りを焼尽せり。その後、再築して古平座と改称したが再び焼失して、古平劇場として再建した。



俳句

古平ホトトギス会

造花めく蝦夷にうの花枯れのこり	山眠る一望館をふところ	国道の並木も燃えたつななかもど	町役場電飾ともる聖夜かな	礎壺覗き移りて海鼠突く	根雪に落ちつきそうな今朝の雪	喉高く秋刀魚のみこむ海猫船に	雪虫を払いのけのけ庭仕事	栗飯を炊いて娘との会食を	氷雨降る幣舞橋の灯りけり	胸高の帯晴れやかに七五三	杖ついて局まで試歩の雪の道	日当れるうちはかがやき冬木立	ホームより電話で済み冬囲い	星月夜積丹岳の峙てり	報恩講御法話心の糧として
福井幸平	齊藤波留	長谷川和子	大島喜恵	水見句丈	越野スミ子	越野敏雄	山口悦子	木村芳園	仲谷比呂子	仲谷安代	岩瀬みのる	大和田絵伊	山口浪	越野清治	仲谷美砂



北政道

札束が右往左往し年明ける
 新春の日本改造政治劇
 国保税町に感謝の老い二人
 医療費が世相をさらに暗くする
 介護料老いて感謝が身にしみる

石井愛子

子に送る荷物の中に心積み
 黒豆に明日の達者を食べている
 老い二人生きる楽しみと添寝する

渡辺ハツエ

塩加減指三本で決めた亡母
 路線バス車窓にヒトが見えぬ過疎
 Vサイン婆の指では様ならぬ

明治四十三年二月二十五日

祝結婚式諸品買入れ控帳

先月、常本利男さんから古い文書類をいただきましたが、その中におもしろい文書がありましたので書き出してみました。	百 合	十 個
これは表書きから分かるように「結婚式披露宴」のための買	み かん	一 箱
い物を記した帳面です。昔は披露宴をかねて結婚式までほとんどが自宅でしたから、親戚や隣近所の人たちが来て、その晴れ	り ん 粉	十 斤
の日の手伝いをしたのです。	麦 粉	三 斤
さて、この材料で当日はどんなご馳走が並んだのでしょうか。	浅草のり	三 斤
鶏 牝 鳥	砂糖(中白)	三 斤
たまご	水引き	三十本
寒 天	小水引き	四十本
かんぴょう	もち米	八 升
しいたけ	ひらめ	十二枚
栗 缶 詰	そ い	大四匹
竹の子缶詰	あ わ び	六十こ
小鳥缶詰	た こ	五はい
長 芋	ほ っ け	三十本
ね ぎ	会 席 箸	三十人前
	柳 箸	三十人前
	酒	二 升
	そーめん	五百匁
	借 り	百 枚
	中 皿	二十人前
	会 席 膳	二十枚
	皿	二十枚
	蒸し茶碗	二十五こ
	以 上	

△7年も一シンよ来い
郷社で鯀大漁祈願臨時祭

新年を迎え「今年の鯀漁はどうだろうか」と、古平の町内の大きな関心事です。町の経済も鯀漁に左右されることから、鯀漁況の予報に一喜一憂します。

しかし何といっても、鯀の寄ってくるのを待っていて獲る漁法ですから、あとは神様や仏様にお願ひするだけと、鯀場の親方もその土地に伝わる漁の行事を守り、占いをし

てみたり、神仏をまつって大漁を祈願します。中には自分の敷地に『屋敷神』をまつる家もあります。

節分の豆占いはどこの鯀漁場でも行われていたといひます。主人が神棚にあげた豆を大きな炉に並べて、豆の一粒づつに地名をつけてその焼け方で漁を占ったり、また、豆に町内の漁場の名前をつけて、どこの漁場がい

いとか悪いとかを占ったりしましたが、自分のところが良くないとい何回でも繰り返したといひます。ですから自分のところは必ず「大漁」でした。

次の文書は当時の郷社・琴平神社での、いよいよ鯀漁期が迫ってくる最後の鯀大漁祈願祭の案内文です。

末ルセヨリセ七日迄
当社に於て鯀大漁
祈願ノ為メ七日間
時祭執行サレタ
願日ニ午前十一時
朱向本度右ノ案内
申上リヤ
三月 古平郷社事務
松尾栄吉様

- ・ なんだかんだⅡどうしても、しやにむに
- ・ 「おれは なんだかんだあの車にする」
- ・ なんぼ、なんぼだⅡ（値段は）いくら？
- ・ （歳は）いくつ？ どれだけ、いくら
- ・ 「おめえ 歳なんぼだ？」
- ・ 「なんぼ言ってもわからねえヤツだな」
- ・ なんもⅡなんにも
- ・ にだるⅡ煮え立つ、沸騰する
- ・ にくたらしいⅡ憎い
- ・ にんべⅡゆがみ、端と端が合わない、ずれ
- ・ めがすⅡ（何を）ぬかす

古平の方言

(11)

- ・ めくい、めぐいⅡあたたかい
- ・ めくたまるⅡあたたまる（外が寒いのに部屋の中において体があたたまってくる）
- ・ めめるⅡぬるぬるしている
- ・ ねえべえⅡないだらう
- ・ 「寒くなつたらもうキノゴも ねえべえ」
- ・ ねがせるⅡ寝かせる
- ・ ねっちゃⅡねえさん、娘さん、若い女の人
- ・ ねつつこいⅡしぶとい、執念ぶかい、いやらしい（奴ーやつ）
- ・ ねぶとⅡ太ももにできた腫れ物
- ・ ねまるⅡ（べつたり）すわる

- ・ のさばるⅡ威張る、横柄おうへいに振る舞う
- ・ のたばるⅡ腹ばえになる、疲れて横になる
- ・ のつけⅡ最初、始め（から）
- ・ のへらつとⅡのっそり、ぼんやり
- ・ のぼせるⅡ思い上がり、いい気になる
- ・ のめくるⅡ前のめり、つまづいて倒れる
- ・ はいほろぎⅡたばこ盆（灰皿ではない）
- ・ はがいぐⅡ（仕事）が順調にいく、（よく）
- ・ 食べるのでご飯がⅡすぐなくなる
- ・ はかはかするⅡはらはらする
- ・ ばぐるⅡ（物を）交換する
- ・ はげぶらⅡはげ頭
- ・ はだげるⅡ衣服が乱れて肌が見える
- ・ はだごやⅡ旅籠、宿屋、旅館
- ・ はだるⅡねだる、
- ・ はちやげるⅡむき出し、めくれる
- ・ はつけおぎⅡ占い、易者
- ・ ばつたらⅡわらで作つたスリッパのようなはき物
- ・ はつたりⅡ大げさな言動、虚勢、ほら
- ・ はつちやがるⅡそり返る、船が岩や陸地に乗り上げる
- ・ はつちやぎⅡがむしやら、夢中
- ・ はなⅡでんぶん、でんぶんを練つたもの
- ・ はなつべⅡ鼻の先、顔のすぐ前
- ・ はやすけⅡ先にかぎの付いた長い棒
- ・ はらせ、はらすⅡ魚の腹部

あとがき

▽「せたかむい」も新年を迎えた今月号で百号となり長寿を喜んでおります。

▽福井さんには第二号から連続して、次回が百回になります。ウミのものともヤマのものとも分らないときから、今もなお健筆をふるって、ますますお元気です。

▽高橋源吾さんの一大長編「古平物語」が終ってさびしくなりましたが、お元気でお過ごしください。△橘さんは大手術をされた後、病院でも原稿を書いてくださったとか……ご健康を念じます。

▽渡辺さん・竹内さんには、昔を振り返りながら味わいのある文章で、みなさんに喜ばれております。▽岬短歌会（山口スエさん）・古平ホトギス会（福井幸平さん）には、作品からその取りまとめとご苦労をいただいております。

▽渡辺嘉之さんの「ふるさとスケッチ」大変好評でした。

▽高橋藤藏さんはワープロで打つたものを、また吉川さんからの大叙事詩で飾ることができました。

▽本間銀朔さんからの「わが町・ふるびら」を百号までと思っていましたが、前号で終り残念です。